

# 三密防止対策遂行型講義と遠隔授業、 通常授業の比較考察を通じた創意工夫と諸課題 ～教育総論の教材開発を事例として～

Inventive Ideas and Issues through the Comparison of Lecture  
under the Prevention of Closed Spaces Crowded Places  
and Close-contact Settings, the Course of Online Lectures,  
and Regular-year Normal Meeting Face-to-face Classes  
-In Terms of Development of Teaching Materials for the Principles of Education

浅田 豊  
Yutaka ASADA

青森中央短期大学非常勤講師，青森県立保健大学健康科学部栄養学科准教授  
Aomori Chuo Junior College, Aomori University of Health and Welfare

Key words；三密防止対策遂行型講義 遠隔授業 教材開発

## 1) はじめに

今年度前期からの教授・学習環境は、感染予防ならびに安全健康最優先の三密防止対策が基本となった。そのため、消毒や検温、飛沫対策、三密対策を徹底した上での対面講義とするか、遠隔授業とするかなどについては、各短期大学・大学の慎重かつ的確な判断のもとで定められる。教職コースを受け持つ教員としては、それらのうち、どのような形態となっても、最大の学習効果となりシラバスの目的・目標を効果的に達成できるように、複数の手段に応じた複数の多様な組み合わせパターン  
の教材を、事前に入念に準備しておくことが今日求められて自然である。そしてその過程において高めていく講義運営上の創意工夫や、解決されるべき諸課題は、後期ならびに翌年以降の授業に対し、有意義かつ貴重な、授業研究上の参考材料となろう。

そこで以上をふまえ本稿では、今年度並びに従来の年度のティーチングポートフォリオをもとにした、教育総論における工夫及び課題に関し、教材開発・活用の観点を中心に、比較に基づき明らかにしていくことを目的とする。

## 2) 授業形態の比較の視点からの教材開発の工夫

教職課程の教育総論の本来の目標である、自身の教育観を確立し学校教育を構成する要素の関係を

探り、かつ教育の意義や制度、課題、歴史的変遷、各思想の特質を理解し、現代においてそれらの概念を教育の理論や実践にどのように活かしていけば、より良い教育となるかをしっかりと思考できる力を育むことを、妨げることや軽減させるような、講義運営とはならないことは無論であり、その目標群を一層高めるための教材開発の工夫こそが、今年度のような特別な環境下では、必要とされる。その際には、どのような環境・状況にあっても受講者の学修が確実に尊重されることを前提とし、受講者自らが概念を構成することに寄与し、ひらめきを引き出すというような教材の性質の基本に立ち返ることが期待される。即ち、教材は学習活動の積み重ねに応じて段階的に基礎から応用事例までが編成されていることが求められ、担当教員による受講者への観察により各自の理解の境界線を見極め自力解決の支援に教材が密接につながることを念頭において準備される。つまり教材が生産的な相互作用を生み出す源泉の一つであることに関し、今一度深く教材を開発する側が認識を深め、表1～2にあるようなことに留意していくことが不可欠であった。

### 3) 授業形態の比較の視点から見た教材開発上の課題

教育総論の講義においては、教材は受講者自身が新しい専門的な知識やそのことに関する受講者仲間の考え、教員の解釈に出会い、それらをまずは自分なりに咀嚼し、主体的に学習課題を掘り下げ、議論することや、見通しをもって将来の自分の活動にどのように活かしていこうかという基礎的な構想立案を手助けするべきものである。その際に、授業序盤、中盤、後半の自分の問題意識を比較し振り返り、提示された以外の課題を発見することにつながる側面も持つべきものである。したがって、学習環境が変化したとしても、その本質は保障されなければならない。この点を細部に至るところまで達成することが今年度の大きな課題であった。仮にリモート・オンラインであれば、独力で講義動画を繰り返し視聴し、課題を読み、考え、機器を介して双方向に対話をするに比重が置かれるであろう。その際にチャットを通じ各受講者の形成的評価がどこまでできるかが課題である。三密防止対策遂行型講義では、筆談の中でボードや付箋に記した考えや質疑内容を、お互いに共有することで、全体の理解が深まる。その際に、相手の質疑内容の意図を正確にくみ取った上で、学習者間共通の疑問・課題へと深化させていくことに、時間を適時かつ十分にかけられることができるかという課題が生じる。教材開発とレディネス把握、学習進捗状況把握、個別支援方策の適宜変更などを総合的に捉え、授業運営と指導案調整を柔軟に行うことが重要な課題であろう（表3～4参照）。

### 4) 今後に向けた展望

筆者はこれまで教育総論の中で、教授・学習活動の最適化の中でアクティブラーニングを展開し、ディープアクティブラーニングへと少しでも進めていくにはどのような教材開発や諸準備が必要となるかという点に関して考察を進めてきた。そのことは本稿の主要点である授業形態・方法ごとの比較においても、同様である。

三密防止対策遂行型講義では、受講者人数を教室収容人数の半分程度とし、必要な場合には複数の教室・複数の受講小集団に分けた分割型の講義となることも想定し、いかなる学習環境にも臨機応変に対応し、受講者同士の学び合いや担当教員からの指導助言を経て集団全体の内容理解の深化に一層つながるような、エクササイズを挿入等の工夫を教材へ配置する留意が必要である。

仮に遠隔授業では、時間共有があり空間共有のない自宅からのオンライン参加のケースでは、ブレイクアウトセッションやチャット機能、アンケート機能を活用して理解状況を適時に把握した上で、各受講者の関心分野や思考進度に合わせて学習を選択・展開させることができるような、教材の一定の体系的蓄積が求められる。さらに通常授業では、課題解決方法の見通しが序盤では十分に立たない、教材の難易度が高い場合に理解間違いを自分で十分に修正できない、支援不足により受講者仲間と自分の考えの違いの比較考察が十分にできない、といったような、どの受講者にも起こる可能性のある、つまずきの多様性を把握した上で教材の編成を行うことが求められる。

## 5) おわりに：まとめに代えて

教材開発は、目標・解説内容・支援方略・到達度評価の一貫した指導・支援の流れの中に存在する。このことは、学習環境や授業形態・方法が変化しても、変わることはない。一方で本稿では、未解決の即ち十分な議論や明瞭具体的な解答に十分至っていない課題も存在する。シラバスの変更開示を伴う最終試験実施の在り方がその一例である。つまり遠隔であれば、機器中断や接続不良という受講者の責任に必ずしも属さない可能性の高い問題への対処のため、答案用紙提出期日に教育的配慮が求められる。また知識面と同等かそれ以上に思考面の比重を考慮した作問も適宜求められる。

さらに、三密防止対策遂行型講義であれば、講義中の議論や発表への積極的な参画という領域の評価比重の見直しが当然求められる。今年度の全国の短期大学・大学担当教員の経験は、以後の教材開発や講義運営にある程度の影響を与えたものと考えられる。そのため、三密防止対策遂行型講義の中で得られた貴重な経験から教育的本質を抽出し、遠隔授業に活かすことや、遠隔授業の中で得られた技術的な事項を三密防止対策遂行型講義・通常授業に活かすことが重要である。また他の教員の取り組みの相互レビューから学ぶことも多いであろう。いずれの事例もすべて、前向きに捉えることが有効である。今年度の創意工夫・課題認識、未解決の課題を引き続き教育総論の中で、授業研究・実践として発展させていきたいと考える。

## 6) 文献

- ① 文部科学省 遠隔教育の推進に向けたタスクフォース (2018) 「遠隔教育の推進に向けた施策方針」
- ② 文部科学省 (2019) 「平成 30 年度学校における ICT を活用した教育の実態・意向等調査」
- ③ 文部科学省 (2020) 「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について」

表1 教育総論の授業形態比較のもとでの教材開発・活用上の工夫（15コマの前半）

教材の開発・活用	三密防止対策遂行型講義	遠隔授業	通常授業
教材からの発問の抽出	教材の要点を解説後に問いをホワイトボードかPPTで示し、全体を観察し、筆談によりペアで問いについての意見や質疑を共有することを支援する。	口頭（音声）にて詳しく述べた上で、電子黒板により補足を行う。教材中に、複数の問いを予め準備しておく。	形成的評価を行い難易度の調節をしながら、板書により、順序良く発問する。
板書と教材活用の連動	教室が広いため板書を大きな文字で行う。教員への質問は大きめのシートへのサインペンでの筆談か、付箋にて提示を受ける。	チャットを通じて、講義進行中に出される意見などへの説明として、板書を行い、教材理解を深化させる。	関心の特定、記憶の振り返り、思考や議論の手助け、要点の整理のために板書を行い、教材理解を深化させる。
机間巡視と教材活用の連動	机間巡視を最小限とし、教室にボックスを用意し、ミニカードへ提案事項を記載させ、回収し、授業に反映させることも有効である。	音声でいつでも、受講者に、授業へ入ってきてもらう。またチャットや挙手機能、アンケートを活用する。	板書を各自のノートに記載している時間を活用し、机間巡視を丁寧に重ね、理解状況を把握し、支援を行う。

表2 教育総論の授業形態比較のもとでの教材開発・活用上の工夫（15コマの中盤から後半）

教材の開発・活用	三密防止対策遂行型講義	遠隔授業	通常授業
問いそれ自体を学生が生み出す、教材の効果・性質	対話を最小限とし、ラーニングポートフォリオを推奨し、次回の授業時の解説や掲示板、メール等により、各受講者の思考をサポートする。	小グループごとの会議ルームに、教員の立場で音声またはチャット（文字）で入り、背景の補足をする事で支援し、支援の必要がない場合には進捗を見守る。	小グループごとに、柔軟に、必要な支援を丁寧に複数回、重ねていく。自発的に問いを生み出すことの例を、全体状況を見ながら、必要に応じて示す。
教材における課題選択の場面	発話を少なく適切にするために、補助資料を準備しておき、必要時に配布する。	学生の予備知識に配慮をする。また、仮にABC複数の選択課題に関し選択者の有無に関わらず最後に解説を行うことで自己学習へつながる。	双方向のやり取りにより個々の学習過程を確認し、発展的・段階的に課題が進むように、課題を組み、順番に課題を提示する。
1コマ90分の過程の配置調節	受身的に教材と向き合うことや、孤立して教材理解が妨げられることを回避するために、つまずきの可能性を予測したゆとりのある時間配置を、講義前半をふまえて、行う。	機器の状況から画面が途切れる学生もいるため、全講義について録画を撮る。また緊急の操作上の相談も入ることから柔軟に対処するための時間を5分程度確保しておく。	聞く、考える、書く、調べる、協議をする、意見を比較する、まとめる、発表する、深める、総括する、振り返るという流れを一つの例とする。

表3 教育総論の授業形態比較のもとでの教材開発・活用上の課題（15コマの前半）

諸課題	三密防止対策遂行型講義	遠隔授業	通常授業
ペア学習 実施時の 課題	筆談に慣れ、円滑・効果的に進むように、筆談のやり取りの例を示す必要がある。	小会議セッションから、全体会議へ戻ってくることに遅れる学生への具体的な支援方法を準備する必要がある。	主体的・対話的・探究的に、すべての個々の学生が取り組めるような、支援が求められる。
班を越えた共有時の課題	班の見解を紙に書いてもらい、教員がマイクで読み上げて、教材の要点と結び付けながら紹介するなどの対応が求められる。	協議結果内容を添付ファイルにしアップする方法やメモシートを写真にとりアップする方法など多様な共有方法を認めることが重要である。	緊張することなく、マイクによる答弁や議論ができるような、学習スキルの涵養も、授業中の学修の中で配慮をする必要がある。
予習復習・自己学習の位置づけ	メール等によるフィードバックにより、学習を支援していく。	PDFファイルを教材共有フォルダに定期的にアップしておく。	一つ前のコマの中で、次時の課題を配布する。

表4 教育総論の授業形態比較のもとでの教材開発・活用上の課題（15コマの中盤から後半）

諸課題	三密防止対策遂行型講義	遠隔授業	通常授業
グループワークまたはペアワーク後の解説	各ペアの意見を集約した展示物を教員が速やかに模造紙などで作成し、密にならない人数で時間を区切り、順番に閲覧してもらい、メモを取らせた上で、解説を加える。	板書計画として事前に準備をしていた内容以外に、新たな発見として導出されたグループの見解と、教材とを結び付けた解説を行う。	適宜、グループの発表を経て、グループ同士の協議へと接続し、その結果を踏まえて、解説を行う。
全集団での質疑応答・まとめの議論	展示物や解説への質疑応答や意見を、別の付箋に記入させ、さらに紹介し、筆談やレポート作成に活用できるように配慮をする。	他者のチャットへの質疑応答や議論を促進し、それをふまえて、教員がまとめていく。	教員の解説から、さらに深まった問いをひらめく学生がいるため、マイクを活用し、全体での議論へつなげる。